

どうして学校に行くのか？

7月、4か月振りに予備校に来た県立大学1年生のYちゃんに問われた大学のレポートのテーマ。聞くに、提出期限が10日後と言う。

「どうして学校に行くのか？」。う〜〜ん、これは是非予備校のスタッフの大学生のみんなと話し合ってみる価値のあるテーマと思い、スタッフにも問いかけた。勿論、私も考えてみた。

もう何年前、約半年に渡ってM先生（当時、元青島北中教諭）に開いて頂いた、オープンゼミ・「歴史と人間ゼミ」の第1回テーマ「学校ってどうしてできた？」（****年4月25日実施）の資料を紐解いて見た。

1. 学校って何に一大人になる、社会人になる、学歴がないと、資格がないと、卒業しないと何もできない。 学校が人生のすべてだ（??）

ところが、こんな声もある。

少年院 駿府学園 文集「安倍川」より

「学校は生徒に同じことを強いている。少しでも本当の自分を出すと、『変だ』と言われる。学校は疲れる所」（恵一）

「僕は勉強は嫌だし、バカだよ。だけど、除け者にせず、仲間に入れてほしかった。先生、僕の気持ちを理解してほしい。学校は好きだもん。一番大切なのは勉強ですか？」（勇樹）

1984年12月3日 信州・安曇野 15才の少女自殺 そのノートより

「学校なんて 大きらい みんなで命を削るから

先生はもっときらい 弱った心を踏みつけるから」

学校って何？勿論、学校に行かなくたって大人になるし、学校は人生のすべてではない。画一化教育にも陥る。「みんなで命を削るから」、この言葉は強烈に響く。

「学校は好きだもん」、どうして？そこに”一つの答え”がないだろうか？勿論、今日は歴史上の、既成概念の学校を考えてはいない。人間は集団動物だよね。「間」という言葉を広辞苑で調べていくと、「めぐりあわせ」という意味が出てくる。人がめぐりあい人間となっていく。「学校が好きだもん」と言った勇樹君にとって学校は、そんな仲間がめぐりあう場所だったのではないのだろうか。

「学校ってほんと何だろう？」それは仲間のめぐりあう場？だから、勇樹君は「一番大切なのは勉強ですか？」と訴える。このところ月に何日か中学校に行き始めたS君にとって、現行制度上中学校は高校に行くための手段として捉えていると言った。だから、学校に行き始めた。今日、不登校で相談に来るN君にとっては何だろう。それが掴めないか

ら、行ってないんだね、きっと。

M 先生に聞けば、ドイツで生まれた学校は、本来職能教育と貴族教育の場であったそう。それが近代化の中でイギリス・ランカスタースクールのように、国造りのため子ども達を囲い込み、共通言語、共通習慣、共通規律を教える場となり、近代国家経済に必要な知識・技術の担い手、共通教養の育成のために公立学校ができ、義務化されたという。

日本ではどうだったんだろう。

ちょっと日本での学校の歴史をざっと追ってみたい。今、私が浪人時代に作成した日本史のサブノートを見た。

皆さんもご存じの通り、奈良・律令時代に官吏養成学校として中央に大学、地方に国学が設けられたが、5 位以上の貴族の子弟や郡司の子弟に限られ、庶民には無縁のものであった。平安時代に有力な氏族によって大学寮付属の大学別曹も設けられたが、平安末期には律令国家の衰退と共に衰微してしまう。828 年に開いた空海の綜芸種智院は、庶民に門戸を開いた独創的なものであったが、彼の死後廃止されてしまった。鎌倉時代の金沢文庫及びそれと密接に関連する金沢学校と、室町時代に再興された足利学校は、共に僧侶養成に利用され、教育は僧侶に依存する形であったが、このころ江戸中期に普及した寺子屋が発生した。近世・江戸時代には、幕藩保護のもとに身分制度的な教育が行われた。幕府は昌平坂学問所、諸藩は藩学・郷学で儒学中心の教育を行い、儒学・国学・洋学の私塾の発達、寺子屋・心学舎という初等教育機関の発達はみられたが、一般に画一的、固定的であったことは見逃せない。

明治以降は、例によって M 先生の作成した資料から話します。明治 4 年文部省が設けられ、以後数次にわたる教育法令を発して、日本は近代的教育制度を確立していったが、学校は立身出世、職業・事業成功の道であったことは拭いきれない。明治政府は学校を、エリート教育＝学問、即ち国家のための指導者養成と、一般教育＝教育、即ち実用、実学を身につけるためのものと分けた。共に共通することは、生徒自身のために学校があるのではなく、国家のためにあった。時代と共に姿は変わるが、基本は変わらない。特に昭和初期は、臣民として国家に忠義を尽くす軍国主義教育が推進された。敗戦後、教育の民主化の名のもと、学校は 6・3・3・4 制に改められ、あらゆるすべての子ども達に最善の教育を平等に配分することを目的に、機会均等、普通教育の徹底、男女差別の撤廃、心身の発達段階に応じた教育と改革され、現在に至っている。勿論、これはあくまで過去の学校の話。

日本の心療内科創設に寄与し、「交流分析」を日本に紹介して下さった、杉田峰康・福岡県立大大学院教授（当時）の「登校拒否への援助と直し方」なる講演ビデオで、先生は次のように述べている。

経済学者・マズロー博士曰く、人類はまずは食べていくために狩猟生活を始め、食料の栽培技術と飼育技術を修得してからは、安全な社会の実現（いわゆる警察国家か？）と集団生活ができる国家の実現を目指し、国のため、社会のためと歩み、東西の冷戦構造が解

消した今、人類はひとりひとりの欲求の実現を目指している。人類の欲求の最後のゴールは、自己主張・自己実現であると言う。そうしたことを背景に日本の教育は、明治時代の富国強兵の理念からくる教育と、子どもの権利条約に見られる、子どもひとりひとりの人格を認め、子どもをひとりの人間として扱う人間中心主義の教育理念とのジレンマに陥っていると、先生は指摘している。しかし、歴史の流れは人間中心主義のカウンセリング教育が伝統的な教育の在り方を必ず凌駕する、と先生は明言されている。

今の私達にとって、学校って一体何だろうか。「学校が好きだもん」と言った勇樹君に尋ねてみたい。仲間のめぐりあう場だから？自己主張・自己実現は、たったひとりの世界では成り立たない。他人に自分を主張して、また周りが自分の存在を認めて、いや、お互いにその存在を認め合って初めて成り立つものである。私達は、あるいは今の子ども達は、地域の殆どの同世代の仲間が群れ集う学校にそれを求めてはいないだろうか。勿論、それは学校だけではない。家庭でも、地域社会でも、会社でも・・・こうしたネットの世界であってもいい。しかし、少子化で小さい時から人間関係に揉まれることの少なさに、あるいは、地域社会の人間関係の希薄さに起因しているのか、現実の学校には悲しいかな、一部に自分の存在だけを維持し、“お互いの”存在を認め合わない「いじめ」がある。15才で命を絶った少女は、「学校なんて 大きらい みんなで命を削るから」と、悲しく書き残した。また、そうした場を求める学校には一方で、高度に発達した経済社会中でこれから生きていく子ども達への科学技術の伝達と創造の場としての役割が、現実にある。そこで勇樹君は、「一番大切なのは勉強ですか？」と問うている。

勿論、ここでは主体者（設置者ではなく、子ども達）の立場からの学校を考えている。その一つに、マズロー博士の言葉を借りれば、同世代の仲間が群れ集う学校に、子ども達は「自己実現」の場、即ち、自己の存在感が持てる場所＝心の居場所を求めて通っているんじゃないかな。中には図工・美術の時間にその存在感を感じる子もいるし、Yちゃんみたいに音楽、ピアノにそれを見出している子もいる。あるいは、放課後のサッカーやテニスの部活動に、勿論、数学や理科に、歴史の授業に率先して自己の存在をアピールしている子もいるんじゃないかな。本誌「昔のある少年」も語っていた。「本」の虫に、“昆虫小僧”、“野球少年”に、はたまた“山芋堀の名人”と、いろんな仲間がいて、みんなそれなりに一目置いていた。言ってみれば、分かるまで質問する自分は“質問小僧”かな。」

中には、学校を進学・資格のための勉学の間、あるいは、社会に出て働くための科学技術習得の間、自分の特技を磨く場と捉えて通う子もいるね。確か1997年7月1日、NHKで紹介されたアメリカにある私立学校・サドベリー・バレー・スクールには、個室で教科書とその教師用指導書を片手にひとりで1日一生懸命勉強している子や、近くの大工さんに依頼し、校庭で実際に建物を建てながら、建築を勉強している子ども達、毎日4時間トランペットを吹き続け、音楽院に進み、交響楽団の第1ホルン奏者になった子もいる。その創設者・ダニエル・グリーンバーグ氏（元物理学大学教授）が書かれた「超・学校」（一光社）から引用した。理想としてよく挙げられることの多いこの学校だが、民主主義

の土壌がない日本でこうした学校が育つのはなかなか困難ではと思っている。しかし、諦めてはいないけど。

そんな意味で私は、学校はコミュニティだと思う。うまく表現できないけれど、同世代の人間が群れ集い、語り合い、感じ合いながら、お互いの人間性をぶつけ合い、お互いの存在を認め合って、それぞれの自己実現を目指して成長する、そんな場のように思う。う～～ん、難しいね、このテーマは。今の私の頭では、ここまでかな。こんなんでどうかな？ Yちゃん。またいろんな人と語り合い、本も読んで考えてみたい。